

## 『西鶴名残の友』管見

井上, 敏幸  
福岡女子大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/11928>

---

出版情報 : 語文研究. 66/67, pp.10-18, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 『西鶴名残の友』管見

元禄十二年四月、西鶴遺稿集の最後のものとして『西鶴名残の友』五巻四冊が、北条团水の手によって出刊されたわけであるが、本書についての研究は、「当時においては咄本として読まれてゐた」らしいという野間光辰の指摘以来（『西鶴の方法』『西鶴新新放』所収）、笑話本との関連を重視する方向で進められてきたことは周知の通りであり、またその方向が基本的に正しいこともいうまでもない。勿論、笑話以外に、当時の雑話類（たとえば、巻二―三「今の世の佐々木三郎」における『明良洪範』続篇巻二の黒田信濃守直相の逸話等）や、俳人の実話（巻二―二「神代の秤の家」における貞室・浄久の話等）を踏まえたものであるとの指摘もなされて来てはいるが、笑話本との関連が強く意識され過ぎたためであろうか、一篇一篇の作品に即した形での素材・典拠の探究、また、一篇における西鶴の手法等についての論究は、やや手薄であるとの印象はぬぐいえない。

この小論では、作品一篇に即した形での素材、あるいは典拠について、また、そうした素材や典拠を、如何なる手法でもって作品化していたかを、二つの作品について検討してみることにする。

## 井上敏幸

巻二―一「昔をたづねて小皿」は、およそ次のような咄である。

大坂の俳人達が、上り船を山崎の汀につけ、山崎宗鑑の一夜庵の跡を尋ねる。同行した京都の遊び宿の亭主月夜の四平が、木の葉の中より瀬戸焼の小皿一枚を拾ひ、これは宗鑑内儀の白粉ときに違いないという。一行は、「汝一代の見立」だと大笑いする。帰りがけの船に乗る時、一行の一人が、あの小皿を残してきてしまったなあと、残念がってみせると、この男は、「さもいそがしき中に、又其所に行て取て帰り、「むかしの忠度は、狐川よりひつ婦も俳諧の心こそなけれ、宗鑑の持れし道具をあだにはいたさじ」といったので、皆々感心してほめてやると、「しすましたる貞つき」をしていた。

また咄の序に、皆で「泊り客人、下。長あそびの客人、中。立帰りの客人、上」という宗鑑の壁書に感じ入っていると、この

男も、「もつともと思ひ込」み、京都に帰り、遊び宿の入口に、宗鑑と全く同じ壁書を張付けたのだった。見る人ごとに、「道理至極」だといっているのを聞き、「よい事をした」と思っているのも、全く愚かな男である。さぞかしこの男は、長生きをするだろう。

最後の宗鑑の壁書を用いた落ちは、万治二年刊『百物語』上に、「おどけたるかる口なりければ書とめ」として採録された逸話、「一、上の客人立かへり 一、中の客人日がへり、一、とまり客人下の下」によるものであることはすでに周知の通りであり、また、この逸話の利用が吉江久弥氏が言われているごとく、「無用の物まね」で、宗鑑の有名な壁書の箴言をそのままが家業の上に用いて、我と我が首をしめることに気が付かぬ「愚か成者」の創出のためであったことも自明のことといつてよいであろう。また中段で、忠度をまねて小皿を取りに帰る部分が、「歌人忠度を茶化したもの」であり、「咄とは別に転合口・軽口を自由に用い」た部分であることも、岡雅彦氏がすでに指摘されている通りである。<sup>註</sup>

確かにこの一篇は、月夜の四平という「愚か成者」を主人公として登場させ、小皿の見立て、歌人忠度の茶化し、さらに宗鑑の壁書による落ちを用意することで、連続した笑いに満ちた笑話となつてゐることが容易に理解される。西鶴の創作意図は、この一篇を連続した笑いで満たすことであつたに違いない。しかしなぜ、小皿の見立て、忠度の茶化し、宗鑑壁書という話が繋げられることになつたのかは、それぞれの話を考えるのみでは解けない問題だといわねばならないであろう。西鶴は、何かいま一つ別の素材を用いることで、このばらばらの話を、一篇の咄として展開することができ

たに違いないのである。しかして、その素材とは、謡曲『忠度』であつたと考えられる。

岡氏が「昔の忠度は狐川よりひつ帰し、定家の許にたばこ入を忘れて見えぬことをなげかれし」とあるのは歌人忠度を茶化したものの」と指摘された「昔の忠度云々」前後の文章、

さもいそがわしき中に、又其所に行て取て帰り、「むかしの忠度は、狐川よりひつ帰し、定家の許にたばこ入を忘れて、見えぬ事をなげかれし。云々」

は、ほぼ謡曲『忠度』の次の詞章、  
さも忙がはしかりし身の。く。心の花か蘭菊の。狐川より引き返し。俊成の家に行き歌の望みを嘆きしに。<sup>註</sup>

によつたものであつた。「俊成」を「定家」に変え、「歌の望み」を「たばこ入」にすり変えたものであり、「歌人忠度を茶化し」たというよりも、むしろ謡曲『忠度』の俳諧化であつたといつた方が理解しやすいであろう。というのも、「昔をたづねて小皿」と謡曲『忠度』との関連は、いま取りあげた部分のみではなく、以下のように多くの詞が重なっているといえるからである。

1 山崎の山すがた	謡曲『忠度』	都を隔つる山崎や
2 一夜庵		一夜の宿
3 都にのぼり舟を		都を隔つる山崎や
4 都にのぼり舟を汀につけ		われも舟に乗らんとて、汀のかたにうち出でし
5 玉笹わけく、て		小笹を分け過ぎて
6 爰ばかりの時雨		時雨ぞ通ふ

7 木陰の瀑板  
8 遊び宿の亭主

9 又舟に、乗時  
10 泊り客人

11 客を引請て世わたりにせし宿

木の下蔭  
行き暮れて木の下蔭を宿とせば  
花や今宵の主ならまし  
舟に乗らんとて

一夜の宿  
行き暮れて木の下蔭を宿とせば  
花や今宵の主ならまし

1から6、および9は、そのまま詞が重なっており説明を加えるまでもあるまい。しかし、7・8、および10・11は、一見関連が薄いようにも思われるが、決してそうとはいえないのである。「山崎の一夜庵」は、謡曲『忠度』の1・2・10からみちびかれ、宗鑑内儀の白粉ときが出現することも可能となる。したがって問題となるのは、「遊び宿の亭主」「月夜の四平」が、いかにして登場しえたかでないければなるまい。「昔をたづねて小皿」の7・8・11が、謡曲『忠度』の歌、「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」との関連のみに絞られていることは、「昔をたづねて小皿」の「客を泊める遊び宿の亭主」が、「木陰を宿として提供してくれる桜が今宵の主である」という歌の内容に対応しているということであり、このことをつづめて、「花の宿を提供してくれる主」↓「花の宿の主」とすれば、この「花の宿の主」は、即「遊び宿の亭主」↓「月夜の四平」ということになるのである。

「昔をたづねて小皿」と謡曲『忠度』との関連が、以上のように考えられるとすれば、「昔をたづねて小皿」における、小皿の見立て、謡曲『忠度』の俳諧化、宗鑑の壁書という三つの話材は、実はばらばらにただ思いつくままに並べられたといったものではなく、

先に示したごとく、謡曲『忠度』の1から11の詞章に基づく連想が、自からに咄の流れを決定していく形でもって構成された、西鶴独自的一篇だったといえるようである。

二

次に巻三「入日の鳴門浪の紅る」を見てみる。いま、段落ごとに記号を付してその梗概を示せば、およそ次のような咄である。  
(イ)冬の鳴門見物に誘う人がいた。淡路島に渡り、飯屋より静が古郷志筑の浦を過ぎ、景野の松原、論鶴羽が嶽を詠めて徳島に着き、俳席を重ねたあと鳴門見物に出かけたが、そのすさまじさには驚いた。

(ロ)その後、里の海士へ行くと、西行が休息した跡という草庵があり、今も法師が一人いて、西行が忘れていった煙管筒と西行の荷物持ち八蔵の旅中の覚書を見せてくれた。

(ハ)それより浜辺伝いに、人里離れた山懐にある一つの草庵を訪ねることになった。途中、時雨や霰・雪に悩まされながらその庵に近付き、中を見ると老女がいて、灯をかがけて書物を読んでいた。

あまりの恐しさに言葉もかけずに立ちのき、このことを色々尋ねてみると、それは清少納言の亡魂であろうということだった。あまりの不思議さに、小者を再び見せにやると、あとは野となり、庵の跡は何やら下から燃えている感じだったということだった。皆で清少納言のことを思い出したりした。

(ニ)ところで、阿波の城下町に源氏祖母と呼ばれる乞食がいたが、その老女は、狭衣・枕草子・伊勢物語の註までも暗記しており、

また、四方の山の雲行きを見ては、数日先の天気をあてる能力を持っていた。この老婆を肥後の国へ連れて行き、立派な家に住ませ、その後日和を見せたところ、老女は、「淡路の千光寺山はどこだ、その山の雲行きを見なければ日和はわからない」といったということだった。

本話の冒頭(イ)の、冬の鳴門見物が事実であったことは、既に考証が備っている。野間光辰の説によれば、元禄三年(あるいは元・二年の可能性もある)十一月より十二月にかけての旅行かと推定されている。西鶴の足跡がほぼ文章通りであったと仮定すれば、淡路島北端の岩屋の右下飯屋より、大坂湾添いの海岸線を南下、ほぼ淡路島の中央を横切って、播磨灘側の景野(現在の慶野)松原に行き、更に南下して福良港あたりより徳島へ直行したと思われる。そして徳島より改めて鳴門見物に出掛け、その帰りがけに、(ロ)里の海士に立寄り、西行が休息した跡にある草庵を訪い、さらに(ハ)清少納言の旧跡にちなんだ夢幻の草庵に出会ったという展開になっているが、(イ)・(ロ)が、如何なる事実と素材によって創作されたものか、必ずしも明かになっているわけではない。本章では、この(イ)・(ロ)について私見を述べることになるが、その前に、本話の最後(ハ)の落ちをきかした「源氏祖母」の咄について、従来の研究を見ておくことにする。このことに関しては、野間光辰によって、延宝七年刊の『二葉集』に「源氏ば」の付合があつて当時有名であつたらしいこと、更に「日和見」の類話が伴蒿後の『閑田次筆』(文化三年刊)にあることがすでに指摘されている。この一篇における(ロ)の落ちは、いかにも『名残の友』的な笑いを提供しているとはいえるが、それまでの(イ)・(ロ)・(ハ)の咄の流れにやや唐突な話材をとって付けたような印象

はぬぐえない。なぜこうした一篇が成立したのか、(イ)・(ロ)の素材・典故を考えることで、そうした問題にも言及してみることにする。

まず(ロ)であるが、西行がしばらく休んだ跡の草庵で、西行の煙管筒と西行荷物持ち八藏の覚書を見て、大笑いして帰る場面は、まさに西鶴得意の転合と軽口の場面『名残の友』団水の序にいう「例の狂言」であるが、なぜここで、西行ゆかりの草庵が設定されることになるのかを考えてみたい。本文は、

里の海士といふ所、「又も来て見ん磯崎の松」と、西行法師が読残せしも、まことにおもしろの気色や。しばらく休まれし跡とて、草庵あつて、今も法師のひとり住り。

のごとくであり、「里の海士」の近くに「磯崎」という所もあって、その「磯崎の松」を詠めるために休息した跡に、今は草庵が建てられていると記されている。この記述は、既に指摘されている『遠碧軒記』(延宝三年序)下の文章<sup>注8</sup>。

西行法師淡路へ下向、清少納言墓并屋敷の跡を尋て阿波へゆく。里蛭と云処に屋敷のあと有て墓は今なし。磯松とて此辺に名木の松あり、西行詠歌、えにしあらば又も来て見ん里の蛭のをもがはりすなひそぎの松

のごとく全く同じイメージで、(ロ)の西行が休息した草庵が描かれ、続いて(ハ)の清少納言の夢幻の草庵も設定されたと考えられるのである。

ところで、西鶴の『一目玉鉢』巻四には、「是(明白)より南に岩屋・蛭じまがいそ・須本・由良見えわたる。(中略)爰(由良)につぎきて西行法師が詠めし磯崎の松今に有 浦風になびきにけりな里のあまの焼藻の煙心よはさに ○里の蛭」とあって、「里の蛭」と



「磯崎」とが、図版Ⅰのごとくに描かれている。『一目玉鉢』には、清少納言の墓及び屋敷跡についての記述は見受けられないが、たとえば『和漢三才図会』巻七十二「山城」「清少納言古跡」の条には、「或、曰く、老後死す阿波、撫養郡蟹村、有、墓」のごとくにあって、当時きわめて著名な伝説であったことが知られる。従って『遠碧軒記』の記事は、当時の状況をそのままに伝えるものだったと言つてよさそうである。しかして、その伝説と地理的状況は、近世後期の『阿波名所図会』の頃もほぼ同じであったと推測される。その挿絵によれば、その地理的關係は図版Ⅱのごとくである。とすれば西鶴が、西行が「しばらく休まれし跡とて、草庵あつて」とする

場所は、図版Ⅱの「里海士」と「磯崎松」との間あたりを考へていたというべきであろう。続いて考へなければならぬ問題は、なぜ「磯崎の松」をめぐつて西行伝説がここに伝えられたかである。『遠碧軒記』所載の歌「えにしあらば又も来て見ん里の蟹のをもがはりすないそさきの松」（西鶴が本話に引用しているのもこの歌）、

『阿波名所図会』所載の歌「立かへりまたもながめん里の海士のおもがわりすな磯崎の松」、両者ともにその時代の伝承歌であつて、西行の作ではない。では西鶴は、たまたま実現した淡路島↓徳島↓鳴門遊覧の旅の体験と、『遠碧軒記』の記事等々に窺える伝承によつて本篇を草したのであるか。どうもそれだけだとは思へない。こうした体験と伝承の上に、更にいま一つの素材があつたと考えられる。それは、西行作として享受された『撰集抄』だつたように思う。貞享四年五月、大坂河内屋善兵衛刊の『西行撰集抄』の挿絵が西鶴筆と推定されていることも、こうした考えを支えてくれるのかも知れない。

『撰集抄』巻四一七「明雲僧正藤野浦隱居事」は、「以往、淡路の国にしばらく徘徊し侍りし事ありしかば、その国見ありき侍りしに、藤野の浦と云所侍り」で始まり、そこに「あやしくあさましき庵のやぶれのこ」つたものがあり、主の姿は見えなかつたが、かたわらの板に「北嶺の禪閣大僧正明雲の室也」と書いてあつた。その日の夕方、僧正は山より下りてこられた。そして、「その夜は御庵の傍に侍りて、何となき述懐ども申しだしてたがひに袖をしばらく、のち泣く泣く別れたという咄である。

『撰集抄』の主人公西行が、かつて、イ「淡路の国にしばらく徘徊し侍りし」ことが、本話における(イ)西鶴の淡路島旅行の体験に重なり、さらにその折、ロ「あやしくあさましき庵のやぶれのこ」つたものがあつたとする叙述が、本話(ロ)の、「里の海士」と「磯崎」の近辺における「しばらく休まれし跡とて、草庵あつて、今も法師のひとり住り」という設定を導き出したのではあるまいか。続く(ハ)における夢幻の草庵の出現が、後で述べるごとく『撰集抄』巻七一を下敷にしていることが認められるとすれば、本話における(イ)・(ロ)・(ハ)の咄の流れが、もっぱら『撰集抄』との関連によることに気付かされるからである。西行の四国行きは、事実としては、崇徳院の霊を鎮めるために、仁安三年十月讃岐の国白峰に赴き、その後善通寺に草庵を結んだことが著名であるが、阿波の国への旅は伝えられていない。だが西鶴は、『撰集抄』巻四一七における西行の淡路の国徘徊と「あさましき庵」訪問とを、自己の淡路島旅行の体験と「里の海士」の「磯崎の松」についての西行歌の伝承とを結びつけることによつて、本話のごとき設定が可能であつたのだと理解しておきたいのである。

次に、本話の中心をなす(6)の清少納言の夢幻の草庵の現出に関する部分と、『撰集抄』巻七「唐亭子事」との関連性を見ておくことにする。

先に示した本話の梗概(6)に従って両者を比較してみれば、その類似性は以下のごとくに指摘できる。

#### 1 人里離れた草庵を訪ねる場面

『名残の友』の草庵は、「浜辺伝ひの物淋しく、人倫はなれたる山ばらに、ひとつ庵あり」と提示されているが、『撰集抄』では、主人公亭子が、我家へ帰る途中の「はるかの道」で、「かすかに火」を見つけて近寄ると記されている。草庵へ近寄ることで一致するが、場面や文章が似ているわけではない。だが、草庵へ到るまでの途中の風景描写には、共通する部分が多い。

松の風其ま、琴の音の通ひ、谷水落かた岩をたゞきて颯々の声をなし、(中略)入日雲に埋みて、時雨一通り、間なく丸雪にふり替り、(中略)程なく又雪気色になりて『名残の友』三二一)冬の日くれやすくて、白駒にしの山にかたぶき、(中略)そこはかとなき荆棘のうへには、白雪をまじるにつもり、つらゝにむすばぬ谷川の水の岩間をくぐるばかり、心すこくきこえ侍りける(『撰集抄』七一一)

この両者に見られる、冬の夕暮の描写には注意すべきであろう。西鶴は、『撰集抄』の夕暮から夜にかけての描写を、うまく、夢幻の草庵を現出させるにふさわしい風景描写に転じていたのである。

#### 2 草庵と老女の描写

『名残の友』においてこの場面は、板戸うちよりしめて、ひかりを請る窓とても見えず。ゆがみ柱の

壁のすきより立た眈とましに、年の程は見定めがたき老女の、霜しもいたゞける髪ながら、よしあるさげむすびも、しやれておかしく、身みは割織きりの藤ふじごろもなど、まとふべきものが、紅べにの裾すそをかへし、夜よならぬに灯あかりかゝげて、書物読ける風情、只事ならずおそろしのごとくに描かれている。対して『撰集抄』における描写は、

からうじて尋ねつきみれば、四壁あれて、内もさらに外なるに、誠にけだかくらうたき女房の、髪ゆりかけ琴をひき侍り。こは誰ならんと、見る目めづらかにおぼえ、いそぎ門をたゞいて「宿からん」と云に、(中略)とばかりためらひて、「さらば是へ」とて入れたり。(中略)高灯台に火かきたてて、几帳をたれたり。や、近づき見れば、いよく恋まさりてぞ覚え侍りける。

のごとくである。『名残の友』における「老女」の描出は、傍線部を対比すれば明かなように、『撰集抄』の「琴をひく」「けだかくらうたき女房」を、「書物を読」んでいる「年の程は見定めがたき老女」に転じたものだったと考えられる。このことは、両者における波線部の「ともしび」の役割の違いが、自らに証明していたといえよう。『撰集抄』では、「高灯台に火かきたてて女房を見ると、「いよく恋まさりてぞ覚え」という役割、つまり、「ともしび」は女房を見頭みわすために用いられていたものであるが、『名残の友』の場合には、「夜ならぬに灯かゝげて」書物を読んでいる老女を描くために用いられている。即ち、「ともしび」は、読書用のあかりとして用いられていたのである。このことは、西鶴がこの老女を、清少納言として登場させていたことを意味していた筈である。

#### 3 亡魂についての土地の伝承

『名残の友』における西鶴一行は、恐ろしさにその場を立ち退き、

土地の者達に尋ねてみると、

昔日、清少納言、世に落<sup>ち</sup>て、四国の山家にて、哀れむなしくなりける<sup>なり</sup>と成<sup>る</sup>。「もしやは、そのぼうこんならぬ」。

ということだった。あまりの不思議さに、半道程過ぎて、小者を見せにやったところ、

はや野と成<sup>り</sup>て何もなく、其庵の跡とおもふ所、つねの地に替りて、下より燃<sup>や</sup>こち。

という報告だったとなっている。これに対して『撰集抄』は、その宿に一夜を明かした亭子が目を覚し、あたりを見てみると、

広々たる野のすゝき一むら茂<sup>しげ</sup>れる中に、死骨の中にぞ寝たりける。(中略)里に行つきて、「此野中、(中略)かゝる事侍る」とき

こゆれば、里の物ども、同じ言葉に云けるは、「しかあるらん、此里に梅頭と云人、みめ美しくきむすめ侍しが、つねには琴をなん

ひき侍りし。(中略)かの骨、夜は女房に交じて、琴をなん弾くなり」と答へけると語りつたへ侍り。

となっている。両者は、草庵が、「野」の只中に現出したものであること、また、亡魂の由来を里人が語って聞かせる点において共通しているのである。

以上、1・2・3とたどってみれば、『名残の友』三十一の中心的部分(分)が、『撰集抄』七一を典拠としていることは、ほぼ間違いないといつてよいと思うが、ここで忘れてならないことは、『撰集抄』

が一夜の出来事としているのに対し、西鶴は、「ねぬに夢見るとは此事なるべし」と自ら記しているごとく、清少納言の住む夢幻の草庵

の現出を、瞬時の出来事としている所に、工夫のあとを見るべきであらう。

ところで、本篇の(ハ)は、

「ねぬに夢見るとは此事なるべし」と、其官女の思ひ出しぬ。是は歌人の心をしのおぞかし。女はひとしほやさしくありたきものなり。

と結ばれる。この清少納言を女流歌人の一人として偲び(傍線A)、更に女性性は優しくあつてほしいという批評(傍線B)が付け加わっているのも、実は、そのまま『撰集抄』七一の結び、

是は、さればいかなる事やらん。(中略)死て後も、猶かの野に心の通ひ来て、我骨をもとめて、かたちを覆い着せて、琴をひけるにや。しかくぞ聞けく、なにとなく恐しく覺え侍れど、又、

艶なるかたも侍るべし。されば、心に何事もいたく物をば思ふまじき事にや侍らん。

のA・Bに導かれたものだったと考えられるのである。

すでに検討したごとく従来の研究は、本話(二)の落ちのきいた源氏祖母の話材の探索に傾きがちであったようであるが、本話を『撰集抄』との関連で(イ)↓(ロ)↓(ハ)と読み進んでみれば、西鶴は、源氏祖母及び彼女を利用しようとする人々の愚かさを笑いとばす前に、女性

が和歌を詠み、物語に精通することを好ましいことと考えていたこと、殊に俳諧を愛好する者の妻にはそうした女性が理想であるとの主張を行なっていたことに注目しなければならぬであらう。本話

において、清少納言を偲び、女性のやさしさを願ひ、源氏祖母の心のきたなさを非難する叙述は、こうした晩年の西鶴の主張の一端であつたともいえるのである。だとすれば、『撰集抄』および伝説を利用しつ、西行から清少納言へと咄を展開し、(二)において源氏祖母を登場させたのも、ただ単に落ちのために用いたものではなく、晩

年の西鶴のいつわらざる問題意識の一つとして、女性が和歌を詠み、物語に精通することの好ましき、また、そうした女性に対する西鶴のあこがれの心が、逆に、狭衣・枕草子・伊勢物語・更に源氏物語迄も、「水の流るゝごとく清き女」でありながら、乞食としてしか人に認められない人間としてのあり方の問題を厳しく批判し、笑いの対象としていたのではあるまいか。

西鶴の作品には、まことに豊かな笑いが備わっているが、それらの笑いが、どのような西鶴の心の色でもって彩られているのか、一話一話についての丹念な読み込みが要請されているといつてよいであらう。

#### 注

- 1 岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」『近世文芸』22号 昭48・7。
- 2 『定本西鶴全集』（中央公論社 昭26刊）巻九頭注。
- 3 「西鶴名残の友の精神」『西鶴文学研究』笠間書院 昭49刊。
- 4 注1に同じ。
- 5 『忠度』の引用は、『謡曲二百五十番集』（赤尾照文堂 昭53刊）による。
- 6 『補西鶴年譜考證』（中央公論社 昭58刊）元禄三年十一月の項参照。
- 7 「西鶴の方法」『西鶴新新放』岩波書店 昭56刊。
- 8 注2に同じ。
- 9 『補西鶴年譜考證』貞享四年四月の項参照。
- 10 以下本文の引用は、西尾光一校注『撰集抄』（岩波文庫 昭45刊）による。
- 11 拙稿『西鶴名残の友』解説（新日本古典文学大系巻77 平成元年四月刊）参照。